

酒匂川で記録された黄脚のセグロカモメについて

室 伏 友 三

A Herring Gull with Yellow Leg Recorded from Sakawa River, Knagawa Prefecture

Yuzo MUROFUSHI

神奈川県小田原市の酒匂川河の付近は県内有数のカモメ類渡来地であり、冬期にはユリカモメ、カモメ、ウミネコ、セグロカモメ等の群れが観察される。セグロカモメ(*Larus argentatus vegae*)は、ピンク色の脚を持った大形カモメ類の中で、酒匂川ではもっとも個体数の多い種類であるが、1984年12月21日、約150羽のセグロカモメ(*L. a. vegae*)群中に、黄色い脚を持ったセグロカモメ6羽(成鳥)が、混在しているのが観察された。これらは、85年4月まで滞在した。また、翌冬の85年12月から86年3月まで以前のように、6羽程度の小群でなく、単独か、2~3羽の小グループでの再渡来が観察されたので、報告してみたい。

観察された、黄脚のセグロカモメは、通常では、セグロカモメ(*L. a. vegae*)と行動をともにしているようであった。しかし、日中河川内で休息している時の様子は、やや異なり、他のセグロカモメ(*L. a. vegae*)とは、混じる事なく、黄脚セグロカモメのみで、小グループを形成し、群の中央よりやや端付近に存在していた。移動する時も、だいたい同時であり、水浴、羽づくろい、休息も、おたがいに、接近しており、その距離は他のセグロカモメ(*L. a. vegae*)よりも近かった。

なお、黄脚個体の黄脚セグロカモメの特徴は、第一に、脚が黄色であるという事であり、その他の点については、外見上、セグロカモメ(*L. a. vegae*)とほとんど

と差は認められなかった。特に、脚が水中などに、没していると識別は非常に困難であった。

しかし、自然光の中での両者の差異は顕著ではなかったものの特に、曇天の日などには、その背面は黄脚セグロカモメの方が、やや濃いように感じられ、嘴の色調もやや濃く感じられた。嘴先端の赤のスポットの大きさ、色調に関して、セグロカモメとの差異は認められなかった。

これらの個体は、脚が黄色いという特徴から、セグロカモメの地理的亜種で、ソビエト、中国、モンゴルにまたがる中央アジアに産する *L. a. mongolicus* ではないかと考えられる。

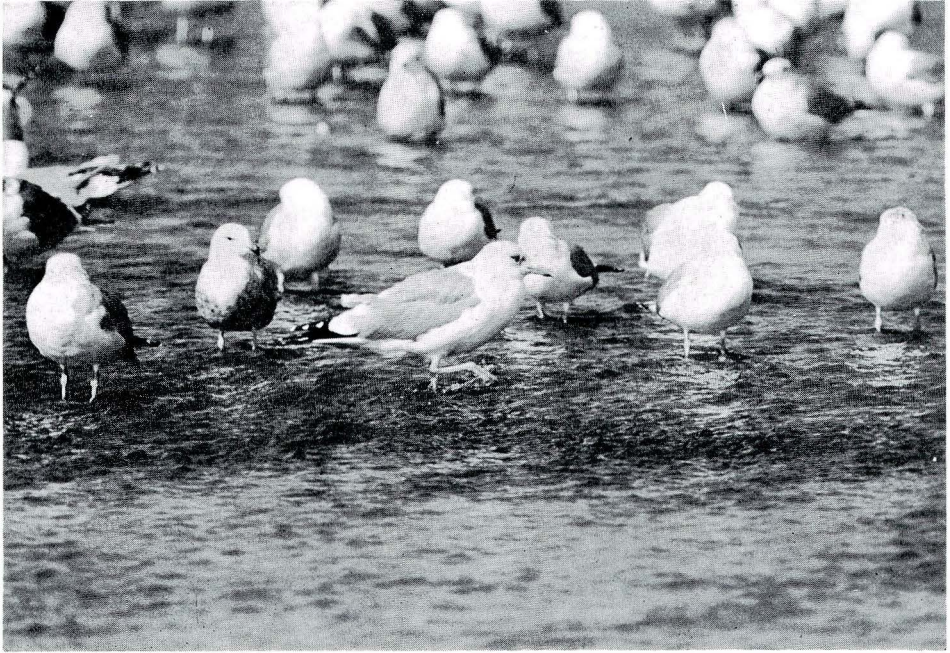
本亜種は Brazil (1983) によって九州にて観察記録されたことがある。

L. a. mongolicus は、本来、越冬地を中国沿岸に求めており、本邦への迷行もじゅうぶん考えられる。特に、二年続けて、単独ではなく、小群、小グループで渡来してきている事は、単なる迷行としてよいのか又は、越冬地の拡大とも考える事で、興味深い。

文 献

BRAZIL M. 1983 A sight record of Yellow-legged Herring Gull from Kyushu, Japan. *Tori* 32: 112-113.

(箱根町立箱根明星中学校)



黄脚のセグロカモメ，中央横向き1羽 小田原市酒匂川

黄脚のセグロカモメについてのコメント

セグロカモメ，オオセグロカモメ，ワシカモメ，シロカモメなどの，いわゆる大形カモメ類（セグロカモメ種群）の分類は複雑かつ困難を極め，とくに *Argentatus-fuscus*（セグロカモメーニシセグロカモメ）complex の分類は困難である。極端な場合，セグロカモメとニシセグロカモメを統合して1種とする見解から5種に細分する分類まである。

セグロカモメ (*Larus argentatus*) はユーラシア大陸および北米に広く分布し，多数の地理的亜種が認められているが，分類・形態等の特徴から，次の3群に大別される。

1. *argentatus* 群（北西ヨーロッパ，シベリア，北米，4亜種）
2. *cachinnans* 群（南ヨーロッパ，北アフリカ，中央アジア，7亜種）
3. *armenicus* 群（アルメニア，トルコ，イラン，1亜種）

一方，ヨーロッパを中心に分布するニシセグロカモメ (*L. fuscus*) は2亜種に分類されていた（PETERS, 1934）が，DEVILLERS (1983) はセグロカモメの一部の亜種をニシセグロカモメに移籍し，5亜種に分けら

れるとした。DEVILLERS の新分類に徒うならば，これまでヨーロッパに限られていたニシセグロカモメの分布は実際には北シベリア中央部まで達し，北東シベリアにおいてセグロカモメの亜種 *vegae*（日本冬鳥）と分布を接していることとなる。エニセイ地区ではニシセグロカモメの亜種 *heuglini* と *vegae* とが明らかに交雑し，明確な雑種群を形成している。DEVILLERS はこの交雑個体群を便宜上ニシセグロカモメの亜種 *taimyrensis* として分類している。ニシセグロカモメの亜種の中で最も大形で，背の色は両者の中間を有し変異に富み，足の色はピンクまたは黄色である。*taimyrensis* の越冬分布域についてはよくわかっていないが，繁殖分布域から推定して一部は *vegae* の越冬地に渡っているものと考えられる。

DEVILLERS の再分類により，セグロカモメは北方の *argentatus* 群と南方の *cachinnans* 群とにさらに大別される。第1群の成鳥は，背淡色，足は主としてピンク，眼瞼は黄色ないしオレンジ・イエロー，虹彩レモンイエロー，冬羽で頭部の縦斑顕著等によって特徴づけられる。第2群の成鳥は，大形，背・翼上面は第1群より濃い。足は黄色，眼瞼は赤，虹彩は淡灰黄色（亜種 *michahellis*，亜種 *mongolicus* では褐色という者あり）。下嘴の赤斑は第1群より一般に顕著。冬羽で

頭部の縦斑は少ない等によって特徴づけられる。

前述した第3群の *armenicus* 群は、第2群とは顕著に異なる特徴をもつ亜種である。小形で嘴が短かく、横帯があり、初列風切白斑の発達が悪い。虹彩は褐色また日本冬鳥の *vegae* は大形で、背の色は第1群よりはむしろ北米のアメリカオオセグロカモメ (*L. occidentalis occidentalis*) に近い。それぞれは独立種である可能性が大きい(眼瞼の色は *vegae* では赤く、*argentatus* 群とは異なっている—中村)。室伏氏の報告でキアシセグロカモメと考えられた亜種(*mongolicus*) は第2群に含まれる。

室伏氏が観測されたものとおそらくは同じタイプと思われる黄脚のセグロカモメを、1987年1月9日小田原市早川河口で至近距離から観察できた、天候は、風はあまり強くなく快晴であった。約30羽のセグロカモメ (*vegae*) の小群(他にオオセグロカモメ、ウミネコ、ユリカモメ若干を含む混群であった)の中に黄脚個体(成鳥)が3羽認められた。足の色は *vegae* のピンク(肉色)とは明らかに異なり、黄色を帯びるが、肉色を基調に黄色がかかるという色調で、とくに蹼で肉色系が優る。肉色と黄色の混じりあった色調で、全体として鈍い黄色で、近くにいたウミネコ成鳥の明るい黄色とは異なっていた。1羽の背の色は *vegae* よりやや濃い灰色であったが、他の2羽は *vegae* とほとんど差はなく、淡灰色であった。頭部は *vegae* と比較して縦斑が少なく、襟に集中している。眼瞼は *vegae* 同様赤

く、虹彩は1羽で褐色、2羽で淡黄色であった。背の色が *vegae* よりやや濃く、褐色の虹彩をもった個体の下嘴の赤斑は鮮やかに顕著であった。

1984年から連続して3年渡来が確認され、数も少なからず観察されていることは、黄脚のセグロカモメが迷行によるものではなく、恒常的な冬鳥として日本に渡来していることを示唆するものであろう。

vegae の足の色は年令に関わりなくピンク(肉色)であるから、色の足をもつ個体が別系統のものであることはほぼ間違いない。しかしその場合、交雑個体群 *taiyrensis* とセグロカモメ第2群の *mongolicus* のいずれかあるいは両方が渡来している可能性がある。今後、足の色ばかりでなく他の形質についても十分検討し、識別する必要がある、同時に日本に渡来する“セグロカモメ”の分類を洗い直す必要があるだろう。

コメントするにあたり、以下の文献を参考にした。

CRAMP, S and K. E. L. SIMMONS (eds) 1983 The birds of the western Palearctic, vol. 3. Oxford. (とくに Devillers による系統分類の部分)

DWIGHT, J. 1925 The gulls (Laridae) of the world: their plumages, moults, variations, relationships and distribution. Bull. Amer. Mus. Nat. Hist. 52: 63-401.

GRANT, P. J. 1986 Gulls, a guide to identification. second edition. T&AD Poyser, England.

(中村一恵)